

たぐみ

CraftsmanShip

- ・金子量重監修 「暮らしの多様性」展
- ・佳いものを造りたい 佐藤阡朗

第41号

”百年に一度“ということ

百年に一度の世界的な恐慌だといふ。百年ほど前というとき、文学好きにとつて記憶に残るのは、明治四十三年（一九一〇年）一月の、武者小路実篤、志賀直哉、柳宗悦らによる雑誌「白樺」の創刊であろう。国際的な事件では同じ年の、日本による韓国併合（一九一〇年）を皮切りに中国の辛亥革命（一九一一年）、中華民国の成立（一九一二年）、そして第一次世界大戦（一九一四年）やロシア革命（一九一七年）とつづく。

経済的には関東大震災（一九二三年、その年九月「白樺」廃刊）から満州事変（一九三一年）にかけての頃に世界恐慌が起きた。おおむね世界経済の不況は、国際的な変革に連動するとみていい。いずれにせよ世界各地における民族自立の動きと、大国による世界分割へのあくなき闘争が第二

次世界大戦を引き起こし、今日へも深い傷跡を留めていることは紛れもない事実であろう。

今回の世界恐慌が、アメリカのサブプライム住宅ローン破綻に端を発し、電子商取引（ネット）によるグローバルな金融市場もまた、实体经济の二倍、三倍の規模に取引が膨らむという虚構を生んだ。そして製造業もまた実需要をはるかに超える生産過剰を知りながら歯止めの利かない現実にあつて、破綻はとうに予想されたことであつた。

昨年十一月、アメリカの三大自動車メーカーの実質的破綻が明らかになつたあと、ある会合でイランの貿易商A・ソレマニ氏と同席した。そこで同氏から今の世界経済の状況をどう思いますか、と問われたのであつた。

私が「かえって良かったのではないですか」というと、氏は「私もそう思います」と答えた。もとより私たちは世界の民衆に深刻な影響を及ぼす不

況を喜んだのではない。だが二十年前のソ連崩壊に引き続く、今度はアメリカ中心の金融資本主義崩壊の前兆だとすると、未来への展望は明るいと思う。

いつの世でも変革や革命は国際的には時差をとまなうが、今回は同時進行である。世界同時不況という、かつてない挫折体験の共有は、人々にとって今まで以上に地球環境や食料、エネルギー資源などの問題意識の共有感を自覚させずにはおかないだろう。

それとともに異なつた宗教、宗派や人種、文明観を超えて共生の道を探ら

ねばならない。人は失敗体験の学習の中からでしか再生への道筋を見出すことはできないのである。

今、原点回帰といい、日本の時代ともいう。その言葉の真の意味は、自然に根ざし、他者との共生や、多様な宗教、固有の生活文化を尊重する、私たちが永いあいだ培ってきた日本人の特性にある。幕末、明治維新から五十年プラス百年。今こそ私たち日本人が、世界の調和と人々の共生のためにリーダーシップを発揮すべき時ではないであらうか。

(志賀直邦)

アジア民族造形の旅 金子量重監修

「暮らしの多様性」展を観て

志賀 直邦

昨年秋、九月三十日から十一月二十四日まで表題の企画展が開かれた。会場は新橋・汐留地区にあるJR東日本の「鉄道歴史展示室」で、文化庁の後援であつた。

会場には、アジア民族造形学会の金子会長が永年にわたって蒐集した、アジアの生活工芸品から厳選された百点が巧みな構成で陳べられ、また入口に近い壁面に、金子氏制作による世界初

の「色分けアジア全図」が掲示された。

この色分け地図は、いまから三十年以上も前から金子氏が提唱されてきたものである。従来の世界地図が大航海時代の西欧の支配観に基づいたものであることを指摘し、たとえばヨーロッパからみたアジアについて近東、中東、極東とすることの不合理性を批判する。

近代における国境の線引きは、第一次世界大戦と第二次大戦の前後に欧米列強によって画定されたといつていい。民族の実態を無視し、大国の利害得失の駆け引きの結果として生み出されたこともあつた。それらのことも事実にして考慮した上で、金子氏は全アジアを大きく四つに分けたのであつた。

つまりアジア全体を、東から日本、韓国、北朝鮮、中国、モンゴル、台湾それにシベリアを含め、東北アジアとする。そしてフィリピン、タイなど



女性衣装 (ラオス)
上衣、スカート、肩掛け



白釉青彩幾何文碗 (ウズベキスタン)



石彫機織り像 (インドネシア・スンバ島)

十一ヶ国を東南アジア、インド、ネパールなど七ヶ国を南アジア。さらにイラン、トルコ、クルド自治区、アラビアなど二十五の国々を西アジアとし、それらを四色に色分けしたのであった。

この色分け地図は、これまでアジアの全体像を認識しにくかった一般の来館者に好評で、“目からうろこが落ちた”と語り合っていた人たちもいた。金子氏がとくに強調しなかったのは、アジアの諸民族の暮らしの多様性についてであった。アジアは広大であ

る。日本のように四季のある温帯性の地域もあれば、雨季と乾季に分かれる東南アジア、熱帯雨林の島々、砂と岩の西アジアの砂漠化地帯。シベリアのツンドラや針葉樹林帯などきわめて変化に富んでいる。

それらの諸民族の食、住居、衣服、そして信仰が異なるのは当然である。金子氏は永年にわたるアジアへの旅の経験から、諸民族の生活文化と日常に用いる器や衣服の限らない多様性と、その美しさに打たれ蒐集を始めたとい

う。これらのものは、いずれも民族のアイデンティティであり原点である。それにも拘らず今日、民族の伝統文化や生活造形の品々に対する正当な理解や共感がきわめて少ない。アジアの

数千年にわたる歴史を見れば、すべてのアジアの地域が相互に交流し、刺激しあい、時には争いながらも学びあい、そして共生してきたことがわかる。

いいかえれば全ての民族、国々は他者との相克や協力、相互交流なしには生存しえないし共生できないということであろう。そういった観点から、金

佳いものを造りたい

佐藤 阡朗

私たちは生れながらにして、悪い子、悪い人に成りたいとは一度も想わなかったと思います。親を始め周りの人々に愛されていくひとでありたいと、無意識のなかで想うのが自然ではないでしょうか。その後、どの分野、職に就こうがその想いは変わらないとおもいます。作り手も佳い物を作りたいと思わない筈はないのです。

簡単な様でいて意外と解り難い言葉

子氏はアジア諸民族の民族造形文化を一堂に集め提示されてきたのであった。

すでにそれらの多くは韓国国立中央博物館や九州国立博物館において展示されているが、昨秋の「暮らしの多様性」展では厳選された展示の中に、民族の多様さと伝統に磨きぬかれた美しさがかがわれ見ごたえがあった。

が(善し悪し・良し悪し)の定義です。日常、色々の場面で私たちは頻繁に(よいひと・いいもの)と言います。基準が曖昧なのでその判断は、個人の好き嫌い、それぞれの趣味趣向で判断される千差万別に拡大分散し十人十色でよいのでは、に落ち着いてしまいます。

いったい良し悪しの基準を定めるのは無理なのでしょうか。それには範囲や目的や方向や使命ぐらいいは条件とし

て絞り込まなければ、具体的には見えてまいりません。

芸術とは、「宇宙の中の時間・空間・あらゆる素材・手段を用いて人間が自分の思想・感情を主張し、表現し、訴えるもの」です。また自然現象は、「森羅万象・宇宙自然の神の手による造化の妙」であって、(前者は個の人間の自己満足の主張が主体であり、後者は宇宙のエネルギーバランスに裏打ちされた、作物です)人の暮らしを物差しにした良し悪しの評価対象になりえません。

(芸術も自然現象も人にへつらったり人の目などを気にする世界ではありません)。美術も芸術も純粹アートも根源は目的を持った「こうげい」から生まれました。

ここで工芸を対象にしてその良し悪しを、話してみたいと思います。世界の永い歴史上、人の暮らしの場で用いられてきた工芸はその用いられる時



佐藤阡朗漆展会場風景(右正面は筆者、平成20年10月)

(時代・場面をふくむ)場(地域・身分を含む)人(民族・人種を含む)各々多様な品々が天然の素材しかなかった時代から人の手によって制作されてきました。厳しい自然と向き合い、生き抜くための工夫と信仰のなかで、手を取り合い助け合って暮らしてきた背景が作らせたに違いありません。そんな

中で(そうだから)人は僅かでも楽しみや美しさを工芸に求めてきました。作り手の自由気ままな立場は歴史上、今の今まで在りませんでした。ある意味芸術的に成つたともいえます(つまり作者の自己満足がゆるされる)時代が到来したのです。

場面・用途・人の立場・機能・素材の限定・地域・気候・信仰と言った制限・制約から自由になると、良いものが出来そうに何故か作り手は思うものです。

あれだけ美しい物が多量に出来ていた時代でも周囲を制約で固められていました。要するに人の美意識や人生の美学は、その人の育つた環境に負うところが最大であると言います。それも目に見えない一種の縛りになります。育つ時代の習慣風俗、生活様式も縛りになります。縛りを活かした知恵と伝統の中で物を作れた作り手たちは幸せだったとおもいます。

道具も材料も動力も温度湿度も、どんな場所・地域でも仕事が出来る時代がきました。ついに様式美や、季節感、使命感、風土感、民族性、信仰など希薄になり、ほとんど無くなって参りました。それが良い物が出来なくなった原因なのか確定できませんが、不思議なことこの世から良い物が消滅したり、産み出されなくなつてゆくのと時が合致するのです。

ここまで来ると佳いもの、物の良し悪しの区分けが見えてきます。制約・縛りが佳いものが産まれる基盤だと気付かねば成りません。ごく稀に本能的に、天才的にその基盤がなくても良いものを作る者が出ますが、万が一の偶然の様なものです。したがって若し我々がよいものを作りたいと想うなら、強く其れを願つてころざし、自分を律し、戒め、内面に制約をつくらなければなりません。

(自分は本来無い、他力によって存在

している) 〓柳宗悦

多くの佳い伝承品に学び、仕事から教えられ、自然の摂理から自然律を受け取り、愛と喜びの泉を発見し、水を汲む努力を惜しまなければ、きつと佳い物・善い物が出来るように成れると想います。いつか、わたしも勤めて行けば必ず善い物が此の掌から産み出せるように成れると信じています。

美は誰にでも届くように目の前にあるようです。手を動かすと魔法の杖のようにキラキラと輝く星が飛び散つ

て、美しい物が現れる情景を想像します。今物作りに入ったばかりの若者でも僅かの技術を身に付ければ良い物・美しい物が出来る筈です。良いは・好い・善い・佳いで少し意味が異なります。有り余る技術を以てしても、返つて美に近づくとはかぎらないのです。

また技術が拙ければ、基本的に物が出来ません。材料がどんなに貴重な物であっても、一歩間違うと材料が威

張つて歩いてしまいます。名前負けの感じで見苦しいものです。師匠や人脈・家柄・学歴などは良い物を作るに、(学び感じる力量に少しは影響あるかも知れませんが)頼らないほうが無難です。

良い人達と自然の季節と一緒にかわらせて頂けることは一番大切な要素です。「人を押しつけても自分だけが幸せに」、「便利が幸せ」の片鱗でも持ったらそれは。美から遠のく毒の手ケツトですからすぐ捨てたほうがよろしい。

「未だ良い物に近づきたいと努力している途中の私が今日も元気で仕事できているのは、使つてやろうと想つてくれる人たちが後押ししてくれるからだと想います。明日もまた「よいものをつくりたい」と「よいものをつかいたい」の想いがしつかり手を取り合つて次代を創つていかなければと思つていきます。

(木曾・漆工)

「個展頒布資料」から

三月の企画展

アジアとアフリカの

民族工藝

◆会場◆

平成二十一年三月二十八日
(土)〜四月六日(月)

三月二十九日(日)は営業、
四月五日(日)は休業いたします。

◆会場◆

たくみ二階ギャラリー

◆出品品目◆

陶器、土器、染布、手織布、
敷物、木工品、金工品、石工品、
玩具、ガラス器、かご、袋
などの網組品、その他

エッセイ 食べ物三題(二) コロ

吉本 力

戦争直後のこと、母に連れられて、宇高連絡船にのり、岡山から高松へそして丸亀の伯母を訪ねたことがあった。その帰り、関西汽船が、神戸の港に入る前に捕鯨船が見えた。大きな船体の後部に鯨を引き揚げる口があった。凶南丸という船名が見えた。

食糧事情の悪かった当時、貴重な蛋白源として、鯨が私たち日本人の命名をどれほど救ってくれたことか。母は、その時、鯨は全く捨てる場所がない。解体してすべてを利用しつくすのだという話をしてくれた。凶南丸の姿は心に焼きついた。少年の胸は大きくふくらんだ。

水菜と鯨の赤身を砂糖と醤油で味付けし、煮きながら食べるのはとても旨く、大好物だったし、第一、安い料理

であるのがよかった。

皮膚近くの脂身の部分は、「コロ」といって、大きく切って乾燥したものを売っていた。水で戻して、二、三センチに切って関東煮に入れると、これがうまい。子供たちは、鍋の中から競争のように見つけ出して食べた。(上方では、豆腐を串に刺して焼いたものの方を「おでん」というので、関東で言う「おでん」のことを「関東煮」と呼んでいる)

アメリカ国内で油田が発見されるまで、アメリカ人たちは、灯火のための油は、鯨の油に頼っていた。油を絞るだけのために乱獲し、北洋の鯨をとりつくした。油をしぼったあとの残骸は、ただ捨てるだけであった。今日のいささかヒステリックな反捕鯨運動は、昔自分たちがやってきた鯨への残虐行為への悔悟の念に発するのかもしれないし、日本のようにすべてを利用しつくすことが理解できず、かつて彼らもやってきたような、油だけ絞って捨て

てしまふことだけしか、想像できないのが原因かもしれない。

西洋人の動物愛護の感覚は、私たち日本人の感覚とは少しちがうところがある。イギリス人の「キツネ狩り」のように、動物の生命を弄ぶ行為がスポーツとされるのは、私たちにはとても理解できないことで、その一方で、動物愛護を唱えることには疑問を持たざるを得ない。そこには国民性や生活感覚の違いもあるのだろう。捕鯨についての国際的な論争の下には、文化の違いからくる根の深いものがある。

しかし、この五十年の間に日本人は随分と食べ物を粗末にすることに平気になってしまった。おいしい鯨が高くなつて、食卓から遠ざかってしまったことは、食べ物について反省すべきよい機会だと思いたい。

食物は人の尊きいのちを守り
生かすためのものをおろそかならず

「土」第五歌集より

(さらさや主宰・大阪市)

たくみ歳時記

東北地方の雛人形

江戸時代後期の記録に、農家では三三
月節句にては土人形を求めて衣裳雛と
交えて飾り。…三月前になれば、い
かなる貧家にも女子は親にすがりて
雛を求めてくれよとせがむなり」とあ
る。

それら素朴な雛も今は極めて少な
い。写真上は、福島県旧三春藩高柴で
こ屋敷橋本家の作。張子製で、旧藩時



福島県高柴デコ屋敷 内裏雛
大 11,025円(税込み)
小 9,292円(税込み)

代の古格を伝えている。

下の雛飾り十点セットは、秋田県の
八橋土人形で、これも今ではただ一軒
で、僅かな数だけが作られている。

永く伝えられてきた、日本の女子の
懐かしい桃の節句をもう一度思い出し
ていただきたいと思う。



秋田県八橋土人形 雛飾り十点セット
45,675円(税込み)

あとがき

人間誰でも、一生のうちに二度ほどは
災害や大きな困難にあらうように思う。こ
こ百年では関東大震災と昭和恐慌、そし
て第二次大戦がある。その後も阪神大震
災や中越大地震があった。

昨年から世界同時バブル崩壊も、
歴史に残る出来事だが、これのばかばか
しいのは、世界中の経済活動が優れた頭
脳と電子機器によって正常に機能してい
た筈が、何の間違いか世界中で破綻し
しまったことである。

もっとも手に汗して働いていた人た
ちはそんなことはお見通しであった。実
体のある生産活動をしてきた人たちは必
ずこの危機を乗り切るだろうし、そこ
から多くの教訓を得て未来に役立てる
ことであらう。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八丁四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇二―三五六五九

定価 六〇円(税込)